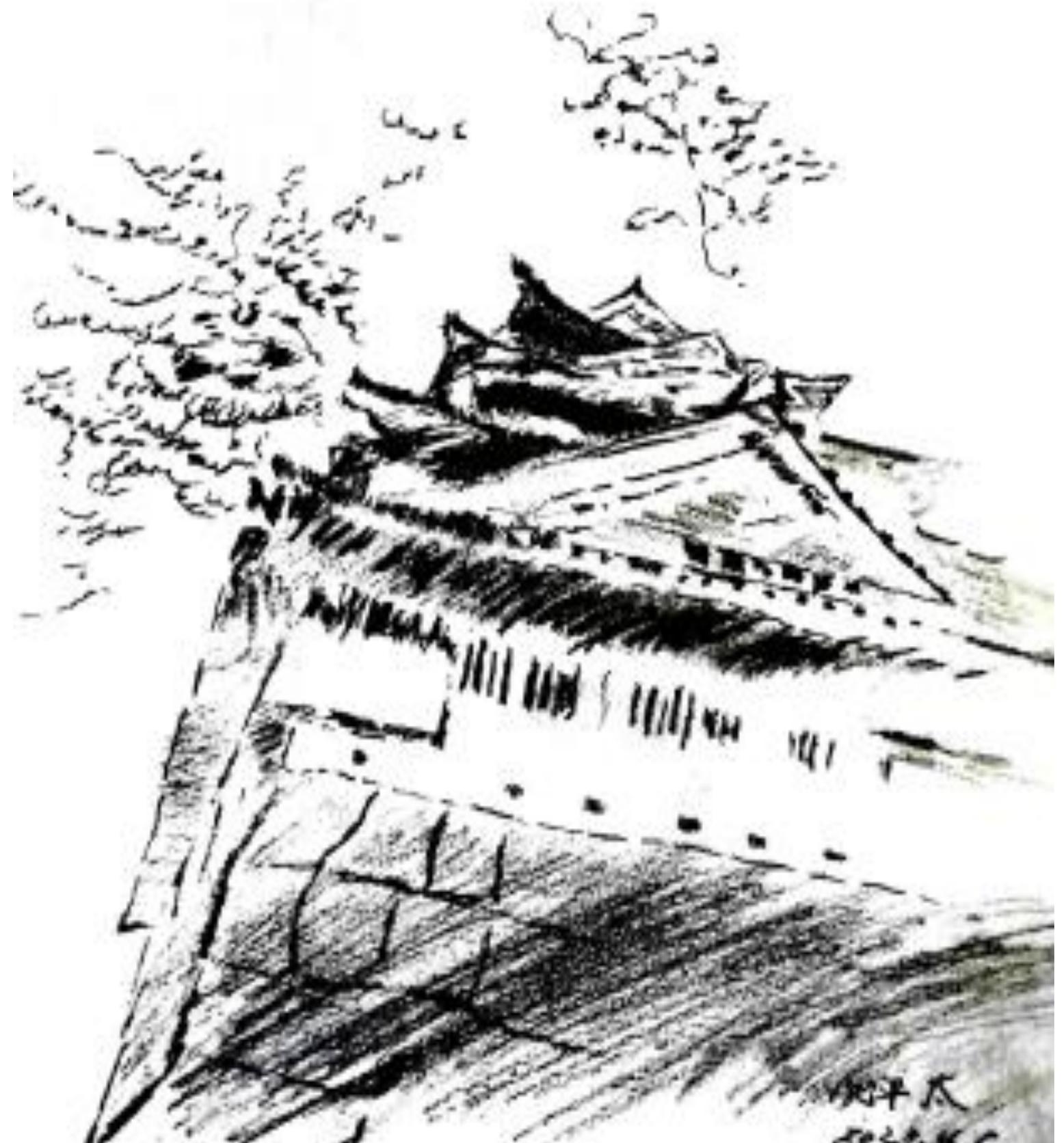


閣守天柳川

2024年2月号



第10回例会 2024年1月15日(月)

投句締切分

お題 「松」

平川柳 選

(選評)

人の句

松は昔から日本では神聖な木として考えられています。その語源は神が天から舞い降りるのを「待つ」ことに由来しています。

「門松」は正月に年神様が家々を訪ねる目印と言われていますが、この句では門松もそれを飾る老夫婦もあるがままを楽しみ充実した日々を過ごしている姿が目につかびます。

地の句

「舟唄」(阿久悠作詞・浜圭介作曲)は演歌歌手・八代亜紀の代表作のひとつ。この曲は1979年の第21回日本レコード大賞を受賞。昨年12月30日に八代亜紀は73歳で逝去。

テレビ番組では「松の内」からこの「舟唄」が「しみじみ」と流れていた。昭和の時代に生まれ、生きてきた私には八代亜紀の抒情的な歌声で歌われたこの歌は心に沁みる。

八代亜紀のご冥福を祈る。合掌。

天の句

能楽(能・狂言)を演じる能舞台の背景には「影向の松」が描かれています。「影向」とは仏・菩薩がその身をこの世にあらわすことをいいます。松はこのように「神の依り代」や「長寿」の象徴と考えられています。その松もいつかは

「立ち枯れる」のです。作者はその原因を生きていることを「諦めた」だからだと語っています。「松」を擬人化し、

人生は諦めてはいけなさと訴えています。川柳人らしい

「穿ち」の視点で「松」を捉えているところに惹かれました。

門松がちくりと刺してイヤミ言う

練行衆籠松明の春を呼ぶ

鉢植えの松盆栽の自己主張

老松が来るころ開ける珈琲店

今もまだ昭和に拘る松竹梅

一本松は私を抱いてくれません

若者には負けん松明を燈す

望郷の松を育てて父母を追う

来ぬ人を松枝で啼くか呼子鳥

松の木がごぼう抜きで友は死に

(五客)

佳5 亡き父と逢えた気がする松林

佳4 晩年にぼつんと見えた下り松

佳3 津波来て一本松を思い出す

佳2 大津波耐えた奇跡の松の意地

佳1 松の内消して轟く津波です

(三才)

人 門松も分相応の古い二人

地 舟唄をしみじみ流す松の内

天 諦めたところで松が立ち枯れる

軸 影向の松にはなれぬ松ぶぐり

ルイ

山野寿之

井澤壽峰

小林満寿夫

小林満寿夫

船木しげ子

島根写太

武智三成

青鬼堂一宇

岩原一角

直子

真鍋心平太

久世高鷲

井澤壽峰

岩原一角

岩原一角

山野寿之

浜脇蓬生

直子

平川柳

お題 「1月」

立蔵 信子 選

お雑煮を食べる正月薄れてる

一月は餅食月と決めている

一月にいろんなドアを開けてみる

年末に向けてやる気を小出しする

正月は子供になってお年玉

逃げなさい 一月の海黒いもの

束の間に年は過ぎ去りニューイヤ―

一念発起スタートラインを切る初月

年明けて走り出したが息が切れ

よみがえる淡路阪神震度7

一月があつという間に十二月

(五客)

佳5 何もかも白紙に返るお正月

佳4 正月は海風になつて読む『古事記』

佳3 大吉を引くまで続く初詣

佳2 除夜の鐘聞きながら書く御慶哉

佳1 一月の琵琶湖一周する二十歳

(三才)

人 一月はえべつさんから鯛を買う

地 ご近所も施設に入る年始め

天 木枯らしのような少女とすれ違ふ

軸 初春の絵馬もみくじも味方する

船木しげ子

ルイ

直子

島根写太

船木しげ子

直子

島根写太

井澤壽峰

岡野とら丸

武智三成

浜脇蓬生

井澤壽峰

平川柳

岡野とら丸

青鬼堂一宇

真鍋心平太

ルイ

武智三成

春田敏晴

信子

(選評無し)

お題 「雑詠」

真鍋心平太 選

身を守るだけだとぬかす犬矢来

想定外昔フクシマ今は志賀

スマ木乗り換えもホントに楽じゃない

鷺と鶴よ仲良く飛んでくれないか

キックバック飲んで踊って皆こけた

元旦の盃祝う光る海

ストローを二本惚れ合うラテアート

ジム通い月謝程には肉つかぬ

香港を見れば統一夢萎み

ニンゲンの知恵の裏には悪がある

打ち解けた積もりの実は毘だつた

ハルマゲの正体見たり神怒り

佳5 狂骨の詩人がひらく落下傘

佳4 ひたひたと南海トラフ岸辺打ち

佳3 川柳の仲間が減つてゆく月夜

佳2 恵方巻き今年は何を巻いてやる

佳1 インプラントほめかされる土生姜

(三才)

人 鮫という奴に食われてゆく平和

地 下駄の裏に喰いこんでいる世間かな

天 4Bで書くラブ&ピース

軸 私には見える琵琶湖の蜃気楼

小林満寿夫

岩原一角

信子

島根写太

青鬼堂一宇

山野寿之

島根写太

ルイ

加山勝久

岡野とら丸

久世高鷲

青鬼堂一宇

平川柳

加山勝久

武智三成

春田敏晴

小林満寿夫

平川柳

船木しげ子

直子

真鍋心平太

(雑詠選評)

人の句

今や「ジョーズ」と言えば鮫の代名詞であるが、「ジョーズは僕にとつてのベトナム戦争だった。」とはスピルバグの言である。映画「ジョーズ」で本当に怖いのは鮫が襲い掛かる前の鮫の視線の映像と音響効果だ。平和が食われる瞬間を実によく表現している。

地の句

大阪中を歩き回って思いを寄せた人妻を探し当てた友人を知っている。五年ほどかけてついに探し当てたのだがその時には相手は不治の病にかかっている数年後に亡くなった。友人が履いていたのは下駄ではないけれどこの句をみて下駄が似合うと思った。

天の句

ラブ&ピースを書くのは色鉛筆でウオー&ピースを書くのなら4Bだと思うのだが、4Bで書くと言い切っているのが面白い。鉛筆画を書き始めてまだ二年ほどだが、色彩を取り除いてすべてを濃淡で表現するほうが味わいが深くなると感じるのも事実である

(短句「春」選評)

人の句

淡路・神戸大震災、東北大震災、熊本大震災、そして

能登地震と四度経験したが、地震国がいつ来るかいまもって分からない。打ち勝ってせめて春を貰いたい。

地の句

お天道さま早く春を派遣して下さい。

国力と人々の気持ちで現地を救って下さい。

天の句

元旦の午後4時10分頃能登地方にマグニチュード7.6の

地震が発生し仰天した。その後も現地の悲惨さは視るに忍びない。

お題 「春」 短句

武智 三成 選

川柳が好き短句尚好き

平和よ芽吹けガザの戦地に

光さず春歌い出す花

夢に出てくる花も満開

春消えたあつという間に

布団跳ねたり春告鳥の声

待たせた桜見事満開

春一番に吹いた八モ二カ

結跏趺坐する初春の朝

アンモナイトの春の潮騒

(五客)

佳5 春風に飛び交う奴唄

佳4 毛馬の春風月と道行き

佳3 梅の香ふわり微笑んで春

佳2 梅の蕾が春ふくらます

佳1 釈迦の生誕春風そよぐ

(三才)

人 ランランランと向こうから春

地 冬蹴散らして春呼び寄せる

天 仮設の窓に春が駆け寄る

軸 あれが青春今も赤面

久世高鷲

平川柳

ルイ

春田敏晴

岩原一角

青鬼堂一宇

真鍋心平太

春田敏晴

井澤壽峰

平川柳

井澤壽峰

青鬼堂一宇

浜脇蓬生

ルイ

波部珀兎

信子

山野寿之

真鍋心平太

武智三成

お題 「積む」

互選

1点

金塊を手にすりや積んでみたくなる
ボランティア徳を積んでるエビス顔
初売りの大根を積む朝の市
MRI川柳に持つ興味

小林満寿夫

ルイ

浜脇蓬生

武智三成

浜脇蓬生

春田敏晴

信子

波部珀兎

波部珀兎

岡野とら丸

2点

難問を積み増している棚の上
積み上げた実積も社も消えて夢
降り積もる雪に埋もれた鄙の里

武智三成

井澤壽峰

平川柳

加山勝久

真鍋心平太

信子

島根写太

井澤壽峰

久世高鷲

島根写太

平川柳

山野寿之

直子

山野寿之

3点

赤黄白赤黄白積んで薔薇
wバーガー食べてた頃の財布
積ん読だけでいい知恵が来る予感
徳積んで積んで大きくなる器
積み重ね馬鈴育む人間味
名を告げず子らの未来に善を積む
Tunaniの子賽の河原で石を積む

平川柳

山野寿之

小林満寿夫

直子

4点

永遠であるはずがない積雪ぞ
たくさんの言葉を積んで跳ぶ明日
愛紡ぎ絆を積んで杖と杖

山野寿之

あぶく銭積んでも値打ちおまへんで
二十億積まれてもいや核のゴミ
積年の無沙汰を詫びて来た賀状
先生の上に先生積む政治

船木しげ子
加山勝久
久世高鷲
真鍋心平太

先生のパン時に昔を積んでおり

春田敏晴

みかん積むように幸せ積んでおく

直子

6点 国債を山ほど積んで口ばかり

船木しげ子

8点 失敗を積み上げてきた知恵がある

岡野とら丸

石を積むあの世この世の出入り口

ルイ

得点があるものをすべて点数順に掲載しています。

得点が空白のものは前行の句と同得点です。

今月の投句者（19名 敬称略）

井澤壽峰 加山勝久 久世高鷲

山野寿之 岩原一角 信子

春田敏晴 島根写太 武智三成

平川柳 ルイ 波部珀兎

小林満寿夫 真鍋心平太 舟木しげ子

青鬼堂一宇 浜脇蓬生 直子

岡野とら丸

太字の方は初参加です。

今月投句者は19名でした。ありがとうございます。

「木曾路はすべて山の中である」 馬籠

真鍋心平太

有名な島崎藤村の小説「夜明け前」の冒頭をご存じの方は多いと思う。木曾路は中仙道の一部なのだが冒頭の段落の最後に「別名東山道といい東は板橋、大津を経て京都まで続く」とあり、私事で恐縮だが息子が東京転勤のときはその板橋に住み、戻って今は大津に居てその子育て応援のために私たち夫婦が大津に居るのに不思議な縁を感じている。

「夜明け前」に初めて触れたのは高校の教科書で、以来何度も挑戦して挫折し、やっと読めたのは70歳のとき四か月の入院を強いられたときである。

主人公青山半蔵は最後に「わたしはおてんとうさまも見ずに死ぬ。」と言い残す。小説の題名からすれば、このおてんとうさまは明治の新しい政治体制のことだと思っるのが自然であるが、入院しながらこの長い物語を読み終えたとき、青山半蔵という人間が仰いでいるおてんとうさまはそんなありきたりなものではなくもつと宗教的な意味を含んでいるように思えた。

若い頃老年を眺める遠さに比べると老年が青年を振り返る時は手に取るように近い。しかし人生に対するとらえどころのなさは、互いに少しも変わらず何一つ本質的に分らずに過ぎてしまう。そして、自分が半世紀前と同じ場所でもがきあえいでいる事だけが確かだ。

詠み終えたあと感傷なしに虚しさだけをみることが出来たように思う。肉体が死ぬように文化も、精神も、すべて滅びることによって、清新なものが迎えられるのだと素直に思えた。墓も墓標名も無意味である。時が来て倒れば、その上に土をかけて踏みならせば良い。なぜならば、すべて過ぎたことだから。「わたしはおてんとうさまも見ずに死ぬ。」とはそういうことではないか。自分は見ないけれども、おてんとうさまは変わらず空にあり続け、誰かがそれを見続けてくれる。それで良いということではないかと思った。

12月の初め息子とその馬籠宿に連れて行ってくれた。老いに鞭打ち杖を突きながら何とか歩くことが出来たのだが、巻末の絵は街道のはずれ、展望台への道筋の風景である。絵の中の一本の道筋が印象に残った。

評論「現代川柳の詩学」を考える ①

川柳文芸の開祖 柄井川柳の「一章に問答」と

川柳宗家の系譜

十八世川柳宗家 閑成庵川柳 平 川柳

私の主宰する東京川柳会は戦後をはじめて川柳宗家を嗣号した十四世川柳 根岸川柳（一八八〇・一九七七）によって一九四八（昭和二十三）年に創設された川柳宗家が主宰する柳風会の流れを汲む川柳結社です。東京川柳会では十四世川柳の逝去後、主宰者が川柳号を嗣号する慣例があり、十五世川柳 脇屋川柳、十六世川柳 青田川柳、十七世川柳 石川川柳と続き、二〇二二（令和三）年四月には私が東京川柳会の主宰者となり、十八世川柳 閑成庵川柳 平 川柳を嗣号しました。

二〇二三年は東京川柳会創設七十五周年の記念すべき年でした。この年に東京川柳会は反戦川柳作家 鶴彬の没後八十五年を記念して「すぎなみピースフォーラム」で鶴彬の活動を紹介し、鶴彬の映画上映と講演会を八月に東京で開催しました。

十四世川柳 根岸川柳は十三世川柳の発意と十二世川柳の後援を得て川柳宗家の主宰する柳風会の総意を得て初世

川柳 無名庵川柳 柄井川柳（からいせんりゅう）（一七二八・九〇）より連綿と受け継がれてきた「川柳」を嗣号しました。

一七五七（宝暦七）年に浅草新堀端も門前町の名主であった柄井八右衛門が「川柳」と号して雑俳の「前句付（まえくづけ）」の点者（選者）として活動を始め、川柳文芸は誕生しました。一七六五（明和二年）五月には柄井川柳が宝暦七年から宝暦十三（一七六三）年までに選句した作品を呉陵軒可有（ごりょうけんあるべし）が「一句にて句意」のわかりやすい「当世誹風の余情」の句を七五七句選んで『誹風 柳多留』（初篇）と題された川柳選句集が刊行しました。この『誹風 柳多留』（初篇）には前句がなくても「句意」のわかる「一章に問答」のある句が収録されています。

柄井川柳は三十三年間の点者生活の中で二十四篇まで『誹風 柳多留』を刊行しています。現在では、そこに収録された江戸時代の「川柳点」の「川柳」を「古川柳」と呼びますが、川柳という文芸名は、この「川柳点」の点（選）がとれて「川柳」となりました。

今回は『誹風 柳多留』に収録されている「古川柳」を取り上げ、川柳の「一章に問答」が、どのようなものを具体的に論じていきたいと思えます。

（執筆者の詳しいプロフィール [こちらをクリック](#)）

第11回 ウェブ川柳天守閣 ご案内

お題 「あちこち」 春田 敏晴 選
「光」 船木しげ子 選
「セール」 互選
「雑詠」 真鍋心平太 選
「空白」(短句) 互選
(投句 各 2 句)

左記の投句、互選投票、結果発表の閲覧は
下記 URL から可能です。

http://excellan.kir.jp/ten_reikai/web_siyu_menu.php

投句、互選投票は会員登録が必要です。

会員登録は下記 URL より

http://excellan.kir.jp/ten_reikai/id_make.php

投句開始 2024年2月9日(金) から
投句締切 2024年2月15日(木) まで
互選投票 投句締切後下記の期間内に投票して下さい。
2月16日(金)～2月19日(月)
披講発表 2月20日(火)から随時閲覧可能になります。

スマホは下記 QR コードから



投句・閲覧



会員登録



パステル画 心平太

(クリックすると大きくなります。)

二〇二四年一月二五日発行

ウェブ川柳天守閣会報

(発行責任者 真鍋心平太)

(編集人 真鍋心平太)

(事務所)

〒 520-0054

滋賀県大津市逢坂一丁目8-1

サンルシエル大津607号室

川柳天守閣

Tel・fax 077(532)4211

携帯 080(2672)4446